

2019年度 JT NPO助成事業
『災害弱者子育て支援プロジェクト』
西日本豪雨（岡山県倉敷市真備地区）の災害支援状況



認定NPO法人 アトピッコ地球の子ネットワーク

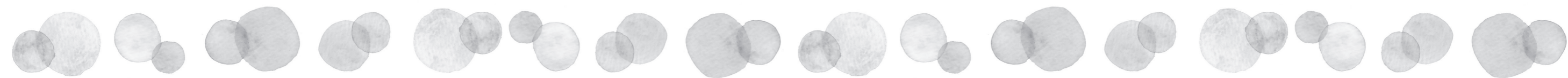
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-34-12 竹内ローリエビル 405
tel.03-5948-7891 fax.03-5291-1392 e-mail:info@atopicco.org
<https://www.atopicco.org>



『災害弱者子育て支援プロジェクト』はJT NPO助成事業です
2020年3月

2020年3月

認定NPO法人アトピッコ地球の子ネットワーク



□ 『災害弱者子育て支援プロジェクト』事業の目的

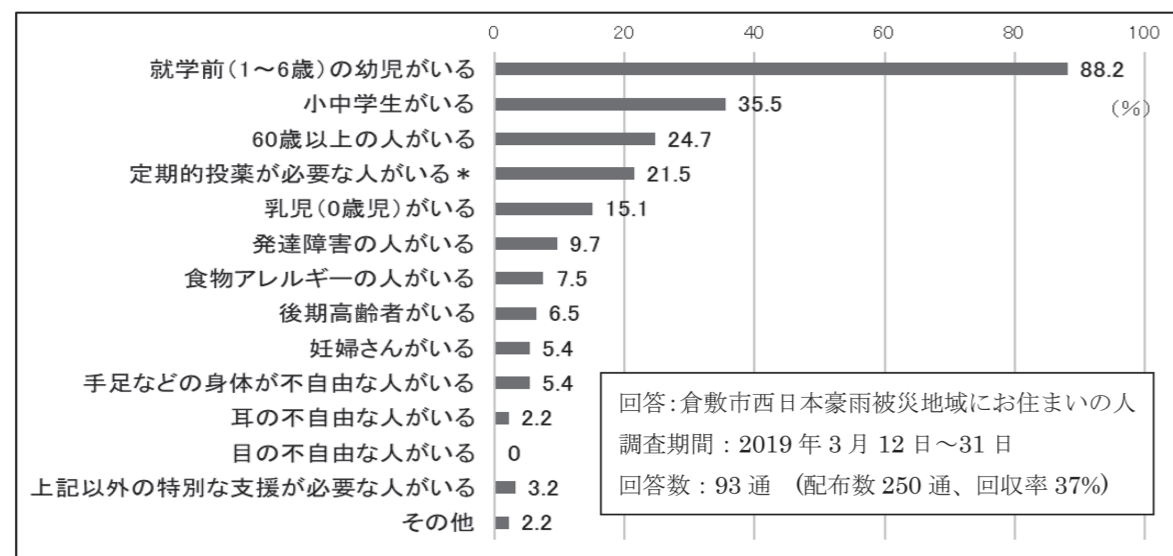
避難所で配布される食品は全てのものに食品表示があるとは限らず、調理した人に聞いても不確かなことが多く、他の避難者が食べ物を食べられた時でも食物アレルギーの人は食べ物を食べることができない場合が多い。食物アレルギー用に管理された環境で作られた食品や食品表示がきちんと書かれてアレルギーが含まれているかどうか確認できるものが手に入るまで、食物アレルギーがある人は非常に困難な環境に置かれます。こうした経験をもち、現在もまだ多くの困難に直面する母子（家族）と共に、医師や保健師、地域の人を借りて語り合う場を作ります。子育て支援事業を実施し今後の災害に備えるために何ができるか考え地域社会の再構築に寄与することを目的とします。

□ 報告の内容

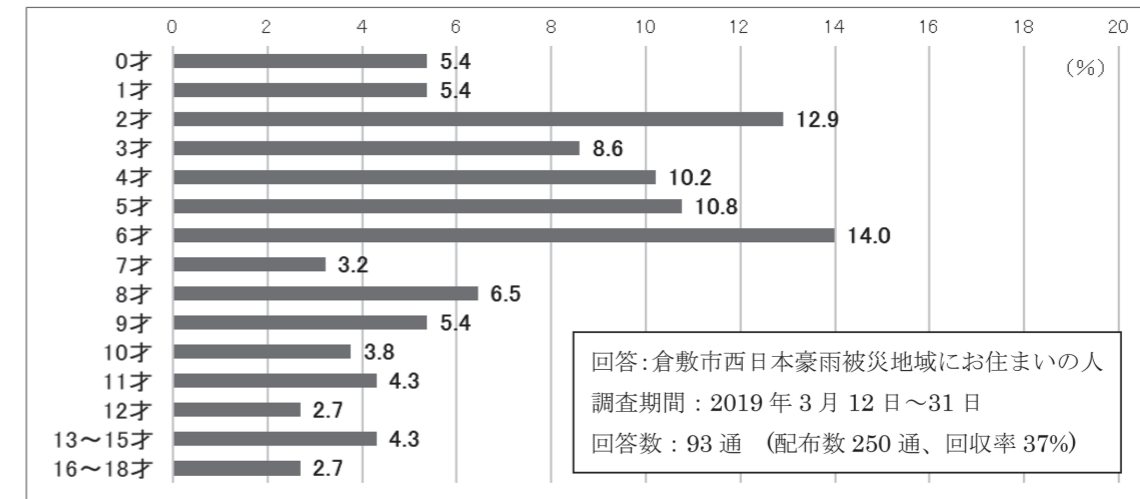
1. 小児科医とお母さんの子育て交流会（第1回～3回報告）
2. 倉敷市真備地区関係者取材
 - ・食物アレルギーの人の様子
 - ・岡本範子さん（倉敷市玉島保健福祉センター 玉島保健推進室（取材当時））
 - ・狩山亜由美さん（真備かなりや保育園園長）／片岡美紀さん（真備子育て支援センター）
 - ・堀内裕介さん（倉敷市文化産業局商工労働部商工課）
 - ・詩叶純子さん（災害支援ネットワークおかやま事務局 岡山NPOセンター 地域連携センター 主任アドバイザー）／永田愛さん（災害支援ネットワークおかやま事務局 岡山NPOセンター 地域連携センターアドバイザー（取材当時））
 - ・被災地域アンケート（防災意識・避難時の食事について）
3. 資料・食物アレルギーの人への情報提供・食物アレルギーの人におこる出来事（避難所／弁当配布／炊き出し／二次避難所の食事提供）・真備地区アレルギー用物資提供のタイミナー一覧・ポスター（災害時のアレルギー用救援要請のための電話番号）・食物アレルギーの子どものための防災
 - ・ローリングストック法
 - ・災害支援報告（2018.8～11）発表資料

□ 被災地域アンケート（抜粋してご紹介します）

◆同居家族の状況



◆同居する子どもの年齢

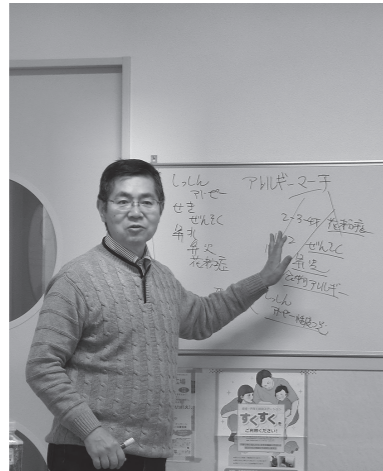


◆避難所での食事での状況で困ったこと、つらかったことなど自由にお書きください 以下抜粋

- ・炊き出しのある間は恵まれていたが、9月以降炊き出しが終了してから同じような内容の弁当が続いたため食べる意欲が低下した。（自立を促すためだと思います。）
- ・当時5カ月の乳児がいたため、離乳食をししばらく開始できず避難所を去ってから開始したため遅れた。
- ・アレルギー除去食がなかった事がつらかった。大人には食事が次の日の夕方までなかった。子どももパン1つ。（同じ避難所でも体育館だけで食事を渡していたので、教室にいた人はもらえなかった。）
- ・同じ弁当が続くと食べなくなった。
- ・お弁当の内容が子供向けではなかったのでおかずはほとんど食べてくれず、カップラーメン等になってしまう事が多々あった。
- ・子供がお弁当を食べないのでごく困った。子供が食べるようなおかずのお弁当ではなかった。大人はガマンできるが、子供に食べてもらえるようにふりかけやスープなど自分で買って食べさせていた。とりにアレルギーの子がいたがすごくこまっていた。
- ・子供を連れて並ばないといけなかったのがしんどかった。
- ・自宅が水に浸かると思っていなかったため、何も食べる物を持って行けなく、夜11時頃避難所へ行き、朝子どもがお腹を空かせて機嫌も悪くなり大変で、昼過ぎたころやっと食べ物の物資が届いた。もう少し早く食事の提供がほしかったです。
- ・ストレスで体が食べ物を受け付けなかった。（4～5日一睡もできなかった）子供の食べるお菓子をもっと持って避難すればよかった。非常食を定期的に食べる機会が必要と感じた。子供にいつも麦茶を与えていたので、避難所で配られた緑茶を飲まなかった。臨月の妊婦だったので張り止めを服用してもお腹の張りが治まらなかった。
- ・全てがつかかった。「設問3.同じものを繰り返し食べなければならず飽きてしまった」←その通り!! だんだんと食欲をなくした。温かいものが本当に欲しかった! もう水害がない町になってほしい。つらい。つらすぎた。苦しい。全てを失った。
- ・ぜいたくは言えない状況だったが、ずっと室温が冷たいものだったのが辛かった。お菓子は沢山頂きましたが、子供がそればかり食べてしまい、親もあまり構えずお菓子を沢山あたえてしまうので、それも辛かったです。
- ・炭水化物ばかりでつまらなかった。家の片づけを終えて避難所に戻ると食事がなかったことがあった。パンも甘いパンの3種類しかなく毎日同じメニューだった。



子育て交流会当日看板



講師木村彰宏先生



子ども達と一緒にお話を聞く

小児科医とお母さんの子育て交流会

木村彰宏（きむらあきひろ）
 神戸医療生活協同組合いたやどクリニック院長
 国立神戸病院小児科（現神戸医療センター）勤務後、いたやどクリニック小児科勤務。2005年9月より、いたやどクリニック院長。著書に『食物アレルギーの治療と管理(共著、診断と治療社)』、『食物アレルギー外来診療のポイント57（共著、診断と治療社）』等がある。日本小児科学会専門医、日本アレルギー学会認定専門医、子どものこころ専門医。（一社）兵庫小児アレルギー研究会理事長。



交流会の後半は子どもと遊びながら先生のお話を聞く場面も



〈第1回〉



小児科医とお母さんの子育て交流会第1回風景

アレルギー疾患と子育て

2018年7月の水害の後、泥が乾いて細かい砂交じりの風が吹くことがあった。泥かきや傷んだ家屋の解体のために大型の車両が行き来するなど、いつも以上に粉塵が舞う時期もあったそうです。2019年3月に真備地域を中心に協力いただいたアンケートでは、65.5%の人が「子どもの健康が気になる」と回答。58.1%の人は「子どもの心理発達、水害後の子どもの気持ちについて気になる」と回答しました。こうしたアンケート結果を受けて、第1回から3回のテーマを決めました。

参加した人のお話の中では「上の子と下の子の発達状況が異なり、下の子の健康状態に気を配っていると上の子が欲求不満になり、かわいそうに感じるがどんな風に接すればいいか悩むときがある」「災害後上の子が災害の絵をかいた。雨が泥水の色の絵を書いていた。当時見たことをいろいろ説明していて、特別な変化があるわけではないのだけれど、子どもの心理的なことが心配になっ

た。」という話題が出ました。

「大変な経験に蓋をするのではなく、経験したことを子どもが言葉にしたとき、周りの大人は怒ったり悲しんだりせず、丁寧に耳を傾け語り合うことが大切」といった先生のお話が印象に残りました。

食物アレルギーの子どもたちが、避難所で食べられるものを手に入れることが非常に困難だったという経験もお話いただきました。

「避難所にいる日数が積み重なってきたとき、子どもたちは大人の状況を理解して心配りし、上の子は下の子の面倒を見たり、騒いではいけない時間を静かに過ごしてくれて助かった」という話題では、「当時は大人に余裕がなくてほめてあげられなかったとしても、ずいぶん経ってから当時の状況を子どもが口にしたときに、あの時はよく頑張ったねと言えたらいいのではないか」という話題も出ました。

小児科医とお母さんの子育て交流会

子どもの気になるところを小児科の先生を囲んでおしゃべりしましょう！
西日本豪雨の後、室内環境や生活環境が変化した人はとても多いと思います。小さな子どもたちにはそうしたささやかな変化で体調が変わったり、落ち着くのに時間がかかる子どもたちもいます。保護者ができること、周りの大人ができることは何でしょうか。子どもたちの健康管理や成長発達について、小児科の先生といっしょに語り合ってみませんか。

第1回：「アレルギー疾患と子育て」
 日時：2019年7月2日（火）10:00～12:00
 定員：10名程度（当日参加可）
 場所：地域子育て支援センター真備かなりや

小児科医紹介
 木村彰宏（きむらあきひろ）
 神戸医療生活協同組合いたやどクリニック院長
 国立神戸病院小児科（現神戸医療センター）勤務後、いたやどクリニック小児科勤務。2005年9月より、いたやどクリニック院長。著書に『食物アレルギーの治療と管理（共著、診断と治療社）』、『食物アレルギー外来診療のポイント57（共著、診断と治療社）』等がある。日本小児科学会専門医、日本アレルギー学会認定専門医、子どものこころ専門医。（一社）兵庫小児アレルギー研究会理事長。

今後の予定
 ○第2回：2019年11月（日時未定）
 「ゆっくりな子、こだわりの強い子、じっとしない子の育て方どうしてる？」
 ○第3回：2020年1月（日時未定）
 「アトピー性皮膚炎、食物アレルギーの子の育て方どうしてる？」
 ＊2020年9月には地域交流会を開催予定です。

事前申し込みは、アトピッコ地球の子ネットワークまでご連絡ください。
 電話：03-5948-7891 メール：info@atopicco.org

お問い合わせ先：NPO法人アトピッコ地球の子ネットワーク
 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-34-12 竹内ローリエビル405
 tel.03-5948-7891 fax.03-5291-1392 e-mail:info@atopicco.org
 法人WEBサイト▶https://www.atopicco.org

※この「小児科医とお母さんの子育て交流会」は（2019年度）JT NPO 助成事業の助成を受け、豊敷市真備地区への災害支援活動の一環として実施するものです。

アトピッコ地球の子ネットワーク
 ひとの力を
 結ぶ。

第1回案内チラシ

〈第2回〉



小児科医とお母さんの子育て交流会第2回風景

ゆっくりな子、こだわりの強い子、じっとしない子の子育てどうしてる？

2019年3月に真備地域を中心に協力いただいたアンケートでは、「子どもの発達障害について」小児科の先生の話を知りたいという人は19.4%、「集中できない、じっとしてられない子の子育てについて」話を聞きたいという人は23.7%でした。

今回は、それぞれのお母さんの自己紹介とお子さんの様子をじっくり聞くおしゃべり会になりました。事前にいただいた質問では「友達におもちゃをゆずれない。順番を待つことができない」3才のお子さんにどのタイミングでどうやって声がけしたらいいのか、先生のお話を聞きたいという質問や、「自分が嫌なことをやりたくない時に『いやだ』と言わず『痛い』というので、本当に痛いのか、ただいやなだけなのかが分からず、病気だったらどうしようと不安になる」といったお母さんの不安の声が寄せられました。講師の木村

先生は子どもの心専門医として沢山の親子に出会い様々なサポートをされています。

この日も、お子さんの状態が、その年齢としては成長発達の過程で当たり前のことなのか、心理発達の課題・問題があってそのような行動をとるのか、何らかの内部疾患があって症状をうまく説明できないために大人から見ると奇異な行動をとるのか、気になること、見極めにくいことを、家族から子どもの日常の様子を丹念に聞き取り、子どもの体調を丁寧に観察することなどで分かったことなど、過去の事例を紹介しながら、参加者の質問に答えていました。

〈第3回〉



小児科医とお母さんの子育て交流会第3回風景

鼻づまり、喉の痛み、病気じゃないけど子どもの気になること アトピー性皮膚炎、食物アレルギーの子の子育てどうしてる？

2019年3月に真備地域を中心に協力いただいたアンケートでは、喘息や鼻炎、花粉症について聞きたい31.2%、食物アレルギーについて9.7%、アトピー性皮膚炎について12.9%でした。アレルギー疾患がある人の多くがアトピー性皮膚炎と喘息というように、いくつかの疾患を併発している人が多いので、参加者は少ないと心配したのですが、沢山のお子さんも参加してにぎやかな勉強会・おしゃべり会になりました。

「咳が長く続くのが心配。ただの風邪なのか喘息などの病気に移行してしまうのではないかととはらはらす。」「花粉症と診断されているが、インフルエンザが流行しているときなどは花粉症かインフルエンザの初期症状かわからない時がある。病院にはどんなタイミングで受診したらいいのでしょうか。」「兄弟に食物アレルギーの子がいる。似たような体質なので他の子も食物アレルギーに

なってしまう可能性はあるのでしょうか」「喘息とアトピー性皮膚炎の両方がある子の子育てはどんなことに注意したらいいのか」といった相談が寄せられました。

先生からは、アレルギーの起こる仕組み、食物アレルギーとアトピー性皮膚炎を併発している子どもたちにとっては、皮膚の良い状態を保つことが食物アレルギーの治療とも深くかかわっている。喘息とアレルギー性鼻炎を併発している場合は鼻炎を根気よく治療することが喘息をよい状態でコントロールすることにつながる。といった内容を分かりやすく解説していただきました。解散後も皆の前では言いにくかったことなどを個別に話すお母さんの列ができていましたが、真備かなりやの先生方にご協力いただき子どもたちも落ち着いて待ってくれました。

小児科医とお母さんの子育て交流会

第2回

参加費 無料

ゆっくりな子、こだわりの強い子、じっとしない子の子育てどうしてる？

日時：2019年11月19日(火)10:00～12:00
場所：地域子育て支援センター 真備かなりや
定員：10名程度

小児科医紹介
木村彰宏(きむらあきひろ)
神戸医療生活協同組合いたやどクリニック院長
国立神戸病院小児科(現神戸医療センター)勤務後、いたやどクリニック小児科勤務。2005年9月より、いたやどクリニック院長。著書に「食物アレルギーの治療と管理(共著、診断と治療社)」、「食物アレルギー外来診療のポイント57(共著、診断と治療社)」等がある。日本小児科学会専門医、日本アレルギー学会認定専門医、子どものこころ専門医。(一社)兵庫小児アレルギー研究会理事長。

第1回は「アレルギー疾患と子育て」をテーマに、日頃のこと、被災時のことを語り合いました。

お申し込み ▶ 地域子育て支援センター 真備かなりや
tel.086-698-7566 ※12:30～16:00

主催：NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク
共催：地域子育て支援センター 真備かなりや

*この「小児科医とお母さんの子育て交流会」は「2019年度JT NPO助成事業」の助成を受け、倉敷市真備地区への災害支援活動の一環として実施するものです。

第2回案内チラシ

小児科医とお母さんの子育て交流会

第3回(最終回)

鼻づまり、喉の痛み、病気じゃないけど子どもの気になること アトピー性皮膚炎、食物アレルギーの子の子育てどうしてる？

2020年 1月28日(火) 10:00～12:00

参加費 無料

場所：地域子育て支援センター 真備かなりや
定員：10名程度

小児科医紹介
木村彰宏(きむらあきひろ)
神戸医療生活協同組合いたやどクリニック院長
国立神戸病院小児科(現神戸医療センター)勤務後、いたやどクリニック小児科勤務。2005年9月より、いたやどクリニック院長。著書に「食物アレルギーの治療と管理(共著、診断と治療社)」、「食物アレルギー外来診療のポイント57(共著、診断と治療社)」等がある。日本小児科学会専門医、日本アレルギー学会認定専門医、子どものこころ専門医。(一社)兵庫小児アレルギー研究会理事長。

アトピー性皮膚炎や食物アレルギーのことはもちろん、病気ではないけど気になること、病院では聞きにくいことなど、なんでも大丈夫。小児科の先生を囲んでみんなでおしゃべりしましょう。

お申し込み ▶ 地域子育て支援センター 真備かなりや
tel.086-698-7566 ※12:30～16:00

主催：NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク
共催：地域子育て支援センター 真備かなりや

*この「小児科医とお母さんの子育て交流会」は「2019年度JT NPO助成事業」の助成を受け、倉敷市真備地区への災害支援活動の一環として実施するものです。

第3回案内チラシ

〈資料1〉

食物アレルギーの人に起こりうること
→→発災直後の避難所

- ・居合わせた人で手持ちの食べ物を分かち合う時食べられない
→発災後、食べ物を口にできない時間が人より長くなる
- ・義援物資に表示がない場合がある
→発症を避けるため判断不能なものは食べることができない
- ・義援物資はパン、牛乳、クラッカーなどが多い
→小麦、乳成分、卵を含むものが多い

▶ 1

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

(避難所) 食物アレルギーの人に起こりうること

食物アレルギーの人に起こりうること
→→避難所の炊き出し

- ・炊き出しをする人が「食物アレルギー」を理解できない
→「わがまま」と誤解する
→「食べられない」ものを示すと「対処不能」になる
→「食べられるものを示す」方法もある
→東日本の震災以降、炊き出しのルール化が進んできた
- ・調理に使われている材料を全て知る必要がある
→材料が入っていたパッケージを貼りだす
- ・調理方法を聞かれる
→乳製品や卵を含むものを入れる前に、アレルギーがある人の分を取り分ける方法を説明する

▶ 3

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

(炊き出し) 食物アレルギーの人に起こりうること

食物アレルギーの人に起こりうること
→→弁当配布(一般の食品)

- ・アレルギーを避けることが難しく、白米だけを食べている
→揚げ物、練り物が非常に多い
→小麦を含む食品が多い
→卵、乳成分を含むものが多い
→魚がアレルギーで出汁も食べられない人は特に困難
→大豆がアレルギーの人で大豆油を避けている人は炒め物、揚げ物が食べられない
→ごまを含む惣菜類が多く、ごまアレルギーの人も選択肢が狭い

▶ 2

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

(弁当配布) 食物アレルギーの人に起こりうること

食物アレルギーの人・乳幼児対応で実際にあったこと
→→ホテル、旅館などの二次避難所

- ・1食当たりの予算が決まっている。人的、金銭的事情から多種類のメニューや個別の要望に答えられない場合が多い
→乳幼児、高齢者用のおかゆの対応不可
→8カ月の子に朝から刺身定食
→乳幼児用の離乳食、おやつ、補食が提供できない
→小麦アレルギー対応不可(うどん、餃子などの時、代替品がないので、みそ汁、漬物、サラダのみをばかり食べることになる)
→1人だけの対応ができないので、全員分の小麦アレルギー用の食品群やレシピを提供した
→調理不要の離乳食は受け取り被災者対応してくれた

▶ 4

NPO法人アトピッ子地球の子ネットワーク

(二次避難所) 食物アレルギーの人に起こりうること

食べるものが何もなかった

1カ月後に届いたSOS

2018年8月、お盆の少し前に私たちのところに倉敷市真備から「食物アレルギーの人への支援をしてほしい」という相談が入りました。

その年の7月7日の西日本豪雨による地域の人々の被害について私たちが知ったのは、翌日のニュース報道でした。7月9日から近隣の医師や災害ボランティアセンター、など思いつく限りの支援拠点に電話やメールで問い合わせをし、食物アレルギーやアトピー性皮膚炎がある人につながろうとしました。いくつかの施設では、「食物アレルギーがある人がいて支援を受けたいのだけれど、施設の立場上、民間から支援を受けていかどうか分からないので、取り急ぎ辞退します」と言われました。

こういった対応は熊本の震災支援の時も、学校、保育園、役場や病院でもそのように言われた経験がありましたから、「支援を受けたいけれど断る」という反応にはあまり驚きませんでした。

ただ、食物アレルギーの人でも日々食事をしなければならぬので、「どうか困った時にはすぐに連絡をください」とお願いをして電話を切りました。

その後、倉敷市近隣に住む人からいくつかの相談はありましたが、語り合うことだけで「物資の支援」には至りませんでした。電話での受け入れ態勢は取り続けていましたが、8月に入りもう支援依頼は来ないだろうと思った、その矢先に支援依頼が届いたのです。

避難直後の様子

食物アレルギーの人と私たちをつないでくれたのは保健師さんでした。避難所にいたAさん、Bさん二つの家族と連絡が取れるようになり、ご家族の様子を教えてくださいました。

避難所では当初食べるものが何もなかったため、避難した人が持ち寄っていたビスケットや飴などを譲り合って食べていたそうです。卵、乳成分、小

麦などがアレルゲンのある子どもたちは、原材料が分からない食べ物をわけあう人の輪には参加できず、親子はじっとがまんするしかありませんでした。

最初に食べ物が配られるようになった時は、子どもだけに配布するもので、おにぎりやパンどちらか一つを受け取るというものでした。食物アレルギーの子どもたちは「おにぎりは食べられるけれどパンは食べられない」のに、避難所にいた沢山の子どもたちが殺到した配布場所にはどこにたどり着くかわからないごちゃごちゃの列ができたそうです。お兄ちゃんはパンを食べることができませんが、弟はおにぎりしか食べられない子どもたち二人が並んだ先はどちらもパンでした。丸1日以上何も口にできていない2人は必死です。お兄ちゃんは弟のために勇気を出して「弟は食物アレルギーがあるからおにぎりしか食べられないのでおにぎりに変えてください」と配る係の大人に声をかけたところ、じゃあこれは食べられないねと言って2つのパンを引き取り、おにぎりを1つだけ受け取ることになってしまいました。

2人で1つのおにぎりを食べることになり、子どもの訴えは正しく聞き取られず、お母さんはただ親子で泣くしかなかったと話してくれました。

近隣の人の好意で出された炊き出しの食事でも材料が分からないため、白いご飯だけ食べる日々。二次避難所に移動してからはお弁当が配布されるようになりましたが、コロッケやハンバーグなど、卵や乳成分を含むおかずばかりなので、結局白いご飯を食べる以外に方法がなかったとお母さんは振り返っていました。Bさんの子どもは発達障害があり、人が食べているときに我慢させることが難しく、ビスケットなどを少量もらって口に含むようなことをさせたため、皮膚症状がたくさん出て大変だったけれど、幸いそれ以上の重い症状が出なかったため、何とかやりくりしてきたと話していました。

避難所の食事で重い症状が出たため、避難所にいることをあきらめて岡山の親せき宅に身を寄せ、そのまま引っ越したという人のお話も聞くことができました。

支援の偏在をなくすために何ができるか

電話で話すだけで支援に至らなかったCさんは、最初に配られたアレルギー用のものは数種類だけで、それを毎日食べることは子どもが耐えられなかったと話していました。災害直後だけでなく、何度も足を運んだ病院では当初と同じものが大量にあって減る様子がなかったけれど、子どもが飽きてしまって食べたがらないので、もう外からの支援をあきらめたのだそうです。災害から1カ月近くたつ頃には、行ける範囲の場所にあるいくつかのスーパーマーケットで、食べられる食品群を見つけることができたので、今はもう大丈夫と言っていました。私たちに連絡をくれた理由は、「病院に大量に同じものを届けられていることを市民団体は知っていますか？」という問いかけをしたかったとのこと。もちろん私たちはどこかの病院に特定のものが大量に届いていたことは知る由もありませんでした。

そうした情報をオープンにしなが、本来は患者支援のためのネットワークが構築できることが望ましいのだと思います。災害支援を目的に倉敷市の医師や精神福祉士、臨床技師などが集まって情報交換する場に参加する機会があり、グループディスカッションの時間にCさんからの話を題材にして、よりよい支援の輪を構築するにはどうしたらいいのか？というテーマを投げかけてみました。

「医師や地元の団体、福祉関係の専門家、私たちのような特定の病気の患者を支援する外部の市民団体など、様々な立場の人の情報交換ができると『支援の偏在』は少し解決できるのではないかと、その場にいた様々な人から意見が出ました。私たちににとってはそうした交流ができたことは幸いだったのですが、そのミーティングの最中でも、支援の偏在によって毎日の食生活がままならない人がいることがとても残念で心苦しいことでした。私たちの経験が、次の災害に直面した時に検討材料となり、よりよい支援につながることを願わずにはられません。

右の写真は見附さんから寄せられた沢山の写真の中からとっておきのものを選ばせていただきました。



ランチボックス届いたよ



親子で頑張った
(仮設住宅でお正月を迎えました)



アレルギー用のおせち
(きれいに盛り付けしていただきました)



支援分担地域を示す地図
(倉敷市災害ボランティアセンターにて)



玉島保健推進室 岡本範子さん

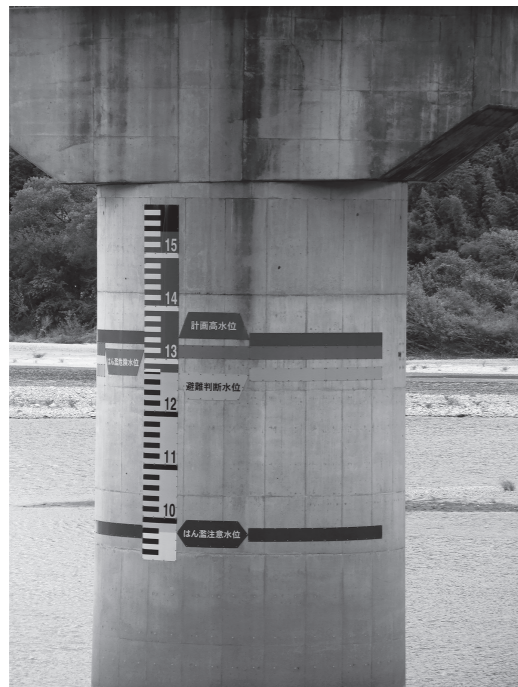
保健師が避難所巡回の中で食物アレルギーがある子の家族を見つけた

いくつかの家族を見つけて、アトピッ子地球の子ネットワークに食料支援依頼の電話をいただきました。それぞれの家族から改めて電話をもらったり、こちらから電話したり、事前のアレルゲンや要望の確認をして、それぞれの人の居場所に食物を届けることができました。

私達は事前にこの地域の患者推計を25人と見積もっていましたが、実際に出会うことができたのは10人でしたが、保健師さんとの連携がなければ、もっと遅いタイミングになってしまったかもしれません。

避難所が閉じられた後は、アトピッ子地球の子ネットワークが保育所の給食支援をしたり、災害時の食事やその後の様子についてのアンケート調査を実施するときに協力していただきました。

その後は、子育て支援センターでおしゃべり会をするときに地域への呼びかけをどうしたらいいか相談に乗っていただくなどのご縁があり、今回改めて水害発生直後の様子や今後の災害時の支援課題などについてお話を聞かせていただきました。



高梁川にかかる橋に書かれた水位を示すメモリ



避難所や仮設住宅に届けたアレルギー用の食品群

倉敷市玉島保健福祉センター 玉島保健推進室(取材当時)岡本範子さん

記憶のない発災当日

2018年7月がどうだったのかあまり記憶がありません。7月6日の晩、総社にあるアルミ工場が爆発して、玉島までどーんと音が聞こえてきました。「なんかあったよ。雷じゃないし、なんだったんだろう?」というような大きな衝撃が一回目にあって、そのあと近くの大木が倒れました。これが2回目の衝撃でした。そこからは断片的な記憶しかありません。

医師会、薬剤師会との連携

真備の避難所に避難できなかった方たちは、まず、真備から水島の方に誘導され、そこでも避難できなかった方達が玉島に来られたようです。「玉島支所管内に来られた方は玉島支所が担当」という感じでした。はじめの頃は職員が避難所のトイレトーパーや毛布が足りないから支所から持って行ったりしました。避難所への支援物資が届くようになると、本庁で対応する流れになったようです。

最初は私たちが避難所を巡回していましたが、手が足らなくなり、医師会や病院の看護部長さんたちに声をかけ、協力を依頼しました。玉島協同病院、玉島病院、玉島中央病院と共に避難所を巡回しました。

医師は医療が必要な人を診察し始めました。医師の巡回で被災者は病院には行かずに薬をもらうことができ、継続的な服薬が必要な人のためには、一週間後にまた医師や薬剤師会が巡回するときに届けることができ、被災者の安心につながったと思います。また、薬剤師会が結構早く支援に入ってきてくれ最後まで動いてくれたことも心強かったです。

周囲の支援を得るために

日頃からお互いに顔が分かっていることが良か

ったことです。医師会の先生も、看護部長も見知った方なので、避難所で行き会ったときは必ず話をし、情報交換をしました。これが、顔が見えない関係だったら話ができなかったと思います。

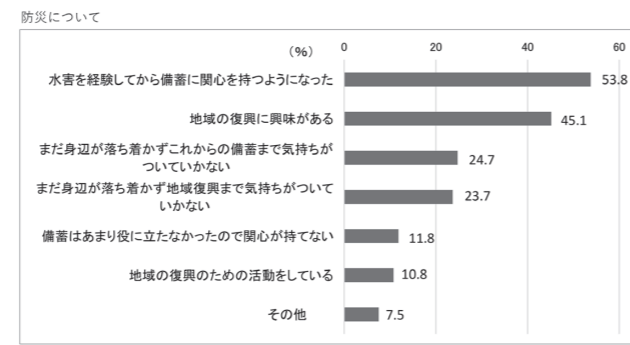
お風呂に入れない人がいた場合に、連絡を取り合ったことがあるデイケアセンターなどに電話を入れるといったことも、私たちがしました。地区の社会福祉協議会の方が、お風呂に入れていなかった人を2週間ぐらい毎日特別養護老人ホームのお風呂に連れて行ってくれました。

また、避難所には何の問題もありませんという連絡があったときも、その避難所に行って話を聞くと、糖尿病でインシュリンを保管する冷蔵庫がないといったことに気づく場合もありました。インシュリンをどこで保管したらいいか、小学校の冷蔵庫を借りたらどうか、保冷剤を毎日代えるといいのではないかと目の前の問題を解決するための話し合いをしました。それを聞いてすぐに地元の憩いの家に行き、冷蔵庫や電子レンジなどはありませんかと声を掛けました。憩いの家では「家で使っていないものがあるから持って行ってあげる」とすぐに対応してくれて、全て好意で貸してくれたものを取りあえず設置して解決することができました。団体が交流するようなお茶会に出ては、お茶を頂いたあとに「こんなことで困っている人がいる」という話をする。「私があれば行ってあげるわ」と色々なものを貸してもらいました。小学生がご飯を食べたいと言った時は、男性料理教室グループが頑張ってくれて、ご飯を作ってくださいました。情報を地域の方にお伝えすると、皆さん本当によく対応してくださいました。このように連絡調整の役割をさせてもらいました。

ほかにも、小学校体育館で子どもが走り回る音がうるさいという声と、堅い体育館を歩くと足が悪くなるんじゃないかという声があって、上履きがあったらいいという話になり、上履きメーカーさんがすぐに支援してくださいました。連絡をしたらすぐに小学校に来てくださって、子どもたちに合う靴を寄付して帰られたのです。ペーパータ

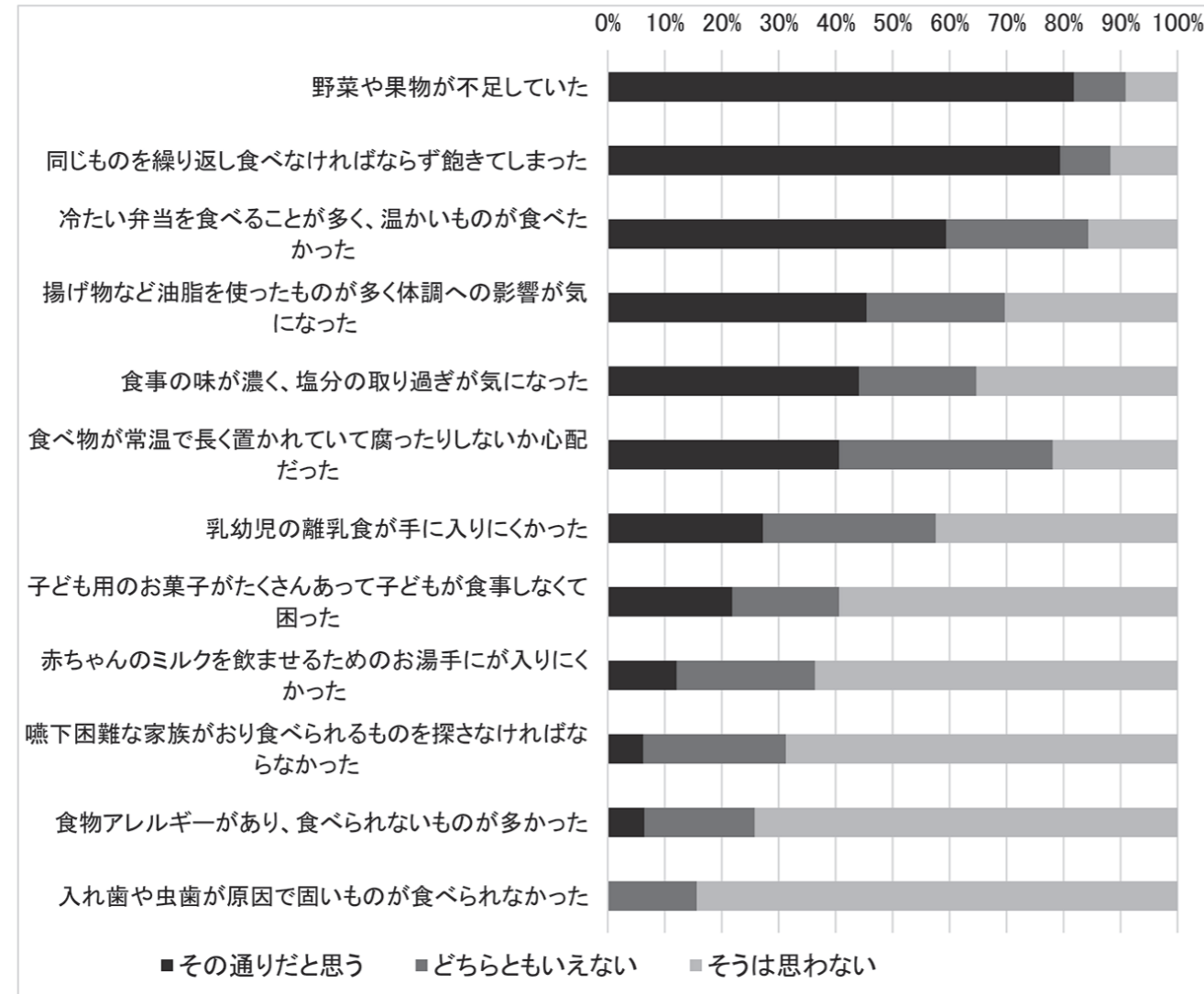
オルが無くなりそうになった時も、製紙メーカーさんがすぐに送っていただきました。

今後のために言えることがあるとすれば、今回のような災害時の対処は、行政だけでやり切ることには無理で、躊躇せずに、助けてくれる人には助けていただくことが大事ということです。到底私たちだけでは無理。世の中にはいろんな専門家がおられるので専門家をお願いします。分からなかったら専門家に聞くようにしないと、自分たちだけで困った方たちを支援することは無理だったと思います。



倉敷市西日本豪雨被災地域居住者アンケート 2019.3月実施
93通回収(保育園、保健所、社会福祉協議会で250通配布、回収率37%)
防災について
(倉敷市西日本豪雨被災地域居住者アンケートより)

避難所での食生活について



倉敷市西日本豪雨被災地域居住者アンケート 2019.3月実施
93通回収(保育園、保健所、社会福祉協議会で250通配布、回収率37%)
避難所での食生活について (倉敷市西日本豪雨被災地域居住者アンケートより)

〈資料2〉

アレルギー用・1型糖尿病用の物資を無料で送ります

被災した患者・家族の皆様
まずはご相談ください

アレルギー

食物アレルギー・ぜんそく・アトピー性皮膚炎

食物、ネブライザー、ケア用品など

Tel ▶ 03-5948-7891
E-mail ▶ info@atopicco.org
HP ▶ http://www.atopicco.org

NPO法人 アトピっ子地球の子 ネットワーク
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 1-34-12 竹内ローリエビル405

1型糖尿病

ブドウ糖など

Tel ▶ 0952-20-2062
E-mail ▶ iddm@japan-iddm.net
HP ▶ http://japan-iddm.net

NPO法人 日本IDDM ネットワーク
〒840-0823 佐賀県佐賀市柳町 4-13

*お問い合わせの際には必ず名前(フルネーム)と電話番号をお知らせください

2019年3月現在

アレルギー・アトピー / I型糖尿病・救援要請連絡先ポスター



真備かなりや保育園外観

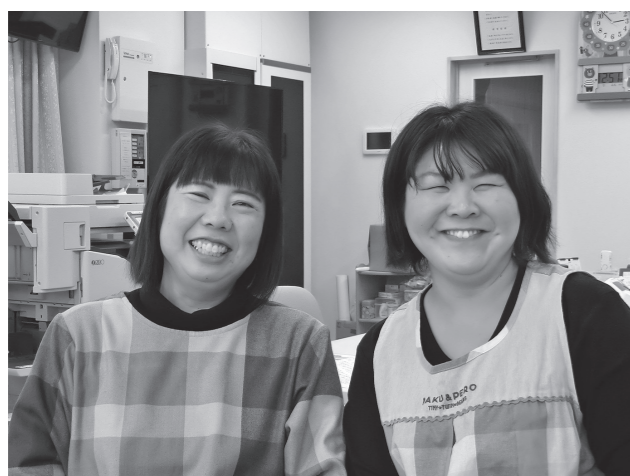
保健師さん、園長先生、そして子どもたちに繋がった

避難所の巡回をしていた保健師さんから連絡が入り、食物アレルギーのお子さんがある家族と連絡が取れるようになりました。保育園にも何人かの食物アレルギーの子ども達がいるということを知り、園長先生にも連絡を取りました。

地域の団体ではない、今まで聞いたこともない団体とどんなことができるのか、園長先生は戸惑ったかもしれませんが、話し合いを重ねるうちに、何をどのようにしたらいいか協力の形が出来上がっていきました。

アトピzzi地球の子ネットワークは、食物アレルギーとアトピー性皮膚炎の患者を支援することを主な目的として支援活動をしているので、提供しようとしている物資は全てアレルギー用のものでした。当時は150人の園児のうち食物アレルギーがある人は7人、アトピー性皮膚炎がある人は10数人でした。遠くに避難して戻っていない家族もいました。

食べるものがみんなに行き渡らない状況で「患者にだけ届ける」ことは現実的ではありませんでした。そこで「食物アレルギーの人が食べられるものなら全員が食べられる」と考え、アレルギーがある人の詳細を確認したうえで、食物提供をくださった企業とも話し合い、保育園にいる園児全員の給食支援の内容を決めていきました。



真備かなりや保育園狩山由美園長／真備子育て支援センター片岡美紀センター長



室内片付けの様子（真備かなりや保育園狩山園長作成pptより）

真備かなりや保育園園長

狩山由美さん

地域子育て支援センター真備かなりやセンター長

片岡美紀さん

被災直後の様子

真備かなりや保育園は、定員150名、乳児保育、延長保育、一時保育に加え休日保育を行っているほか子育て支援センターを併設する地域の子育て拠点です。

2018年7月7日未明、真備かなりや保育園の周辺にも水が迫り、1階はすべて水没し、あと1、2段あがると2階につくあたりまで水が押し寄せていました。

保育士も被災し避難生活が続く中、園児の家庭も早く子どもを預けて家の片付けをしなければならぬ状況でしたから、1日でも早くという思いで保育再開を目指しました。

ボランティア、保育士、様々な人の努力によって、電源容量も少なくとりあえずの状態、エアコンもなく、小さな冷蔵庫と電子レンジ一つなど最低限のものだけ用意して職員室も複数のクラスも給食室も全部2階にまとまったすし詰め状態で

7月下旬に保育を再開しました。

再開直後は、冷蔵庫にたくさんものを入れることもできず、また電気が限られているので他に使用できなくなってしまったり、電子レンジは1台しか動かすことができないため温めるのにも時間がかかったり、2階の部屋ですべての子どもたちが生活をしていたので、電話をするときには廊下に出なければ聞こえなかったりいろいろ不便なことばかりでした。野菜不足は切実でしたが、水がきれいかどうかわからないので生野菜はもちろん使えず、調理に必要な水を確保するのも大変でした。11月に給食が再開したときは、暖かい食事のありがたさを実感しました。

子ども達への食事提供

病院に配布されたアレルギー用の食料を保育園に運びましたが、カレー、ハヤシライスのレトルト、ふりかけなど限られたものだったのですぐに子ども達が食べ飽きてしまっ、食事が進まないようになりました。アトピzzi地球の子ネットワークから、ハンバーグ、ミートボールのランチボックス、コーンスープ、3種類のピラフ、補食用のおやつなどを提供してもらうようになって、1週間のメニューが毎日違うものを提供できるよう



園庭いっぱいになった被災ゴミ（真備かなりや保育園狩山園長作成pptより）

になりました。近隣の企業の協力で、幼児用のお弁当も提供できるようになっていたのですが、調理場がない状況でしたが子どもたちの給食はずいぶん安定していったと思います。その頃は牛乳が手に入りにくくなっていましたのでバラエティのあるレトルトやお弁当はとてありがたいものだったのですが、自宅も被災している子が大半だったので、全体として野菜不足を心配する声がお母さんから保育士からも出ていました。それで、アトピッ子地球の子ネットワークと話し合いをして、常温保存の牛乳と野菜ジュースを少しの期間届けてもらいました。

周囲の環境

なんとか急場をしのいで再開した保育の現場でしたが、保育園の周りの水没した地域には泥が張り付いたように広がり、乾くと微粒の粉塵となって飛んでいました。さらに時間がたつと使えなくなった家を解体する埃や、大きな重機の排ガスがあちこちで広がっていました。空気は悪く窓は開けられず、子どもたちの健康状態は大丈夫なのかという不安がありました。実際に「被災してないけれど喘息があるので家から出ないようにするためお休みします」という子がいました。

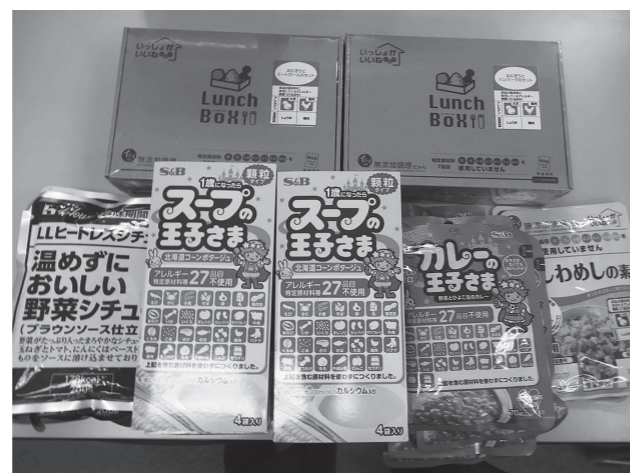
自宅が浸水した子は、すぐには復旧できないため避難所から通園したり、知人を頼って自主避難



給食に代わって保育園が提供するようになったお弁当



野菜不足を補うための野菜ジュース提供
(アトピッ子地球の子ネットワークが給食支援として届けたもの)



食物アレルギー用救援物資
(アトピッ子地球の子ネットワークが初期に届けたもの)

をしている家庭があったり、避難先の近くの保育所に転園する家庭もありました。最年長の子どもたちはこの園を卒園したいので最後までがんばって通園したいと話していました。

様々なところから支援物資を受け取る場合、被災した人だけに渡してくださいということはお断りしていました。子どもたちは、もらえる人とももらえない人がなぜいるのかわからないからです。それに被災していない人達も心がしんどいということもわかっていました。人によっては被災の程度で差別をしてほしくないという思いが伝わって

きました。真備だけが被災していて、一步外の地域に行くときと普段通りの生活を目の当たりにします。大手スーパーではいつも通りセールをしていたし、同じ倉敷市内の他の園ではいつも通りプール遊びをしていたのに、うちの園の子たちだけなぜ我慢をさせられるのか、父母たちの中にはやりきれない思いをする人もあったと思います。真備の子は飲み水も我慢しないとイケない、我慢して我慢して毎日を送っているのに、川を超えると普段通り。自分も含めてですが、何かのきっかけで心の中に「どうして」という思いが沸き上がることがあったと思います。

被災ごっこ

子どもたちは被災ごっこをするようになりました。「物資」という言葉の意味がわかっているのか定かではないような年齢の子がこの靴物資？などと言ったり、浸かった？流れた？などという声ままごと遊びのような場面で聞こえてきました。3歳の子が「物資」という言葉を知っているのです。何かが無くなったときに「これって浸かって無くなったのと同じだね」「新しいもの変わったんだよね」などというのです。

でも水遊びは平気でしていました。水が怖いという子はいませんでした。2019年の夏のプールは子ども達の様子に気がかりで、子どもが怖がるようならプールに入れないほうがいいと思っていましたが、そんな子は誰もいませんでした。短大の心理学の先生からは、子ども達の心に寄り添うサポートをしていただいていたのですが、先生からはいつもと変わらない生活を続けてくださいと言われていました。気がかりなことはやめるのではなくて、普通にしながら日常に戻しましょうと言われていました。

冬がきて、春がきて、梅雨の時期がきて、ちょっと恐怖が蘇ってくるのか雨が多きときは子どもたちが少しざわつきました。スコールのような普通の雨じゃないと感じるようなときは、浸水被害にあったときを思い出さずらく、そんなときはま

まごと遊びの中で被災ごっこが始まりました。

よくよく考えてみると、保護者や保育士などの周りの大人がそういう感じで話をしていたので、大人たちの不安が子どもに現れたのかもしれないとも思います。

どれだけの家族が帰って来られるだろう

まだ、みなし仮設から帰ってきていない人もいて、どれだけの家族が暮らしていた真備に帰って来れるのだろうと考えてしまうことがあります。発災当時、園児の人数は150人くらいでした。今日現在、園児の数は160人を超えています。世帯がたくさん戻ってきているとは限りません。その他の地域の人はこちらに少し来ていると思います。0歳児は、1/2しか園に戻って来ていません。1歳児も少ないです。年月が経てば次第に園児が減っていくことが考えられます。家を建て替えた人たちは帰ってくるけれど、アパートの人は不安なところに戻るよりは別の場所に落ち着いてしまうのではないのでしょうか。

一方高齢者は、発災直後はもうしんどいから家を建て替えたりできないと言っていました。2020年1月の今現在の状態はどうかというと、ほとんどのお年寄りが帰ってきました。避難先では知り合いが少ないので、お金がかかっても家を直して戻ってきたいと思う人が多かったのではないのでしょうか。保険や保障、債務整理など、被災者支援の制度がいろいろあって家を直せる人が当初イメージしていたよりも多いと感じました。

保育園では2019年の七夕まつりが普通にできました。2018年は七夕祭りの当日に被災したので、今年2019年はちょっとだけ雨が降ったけれど実施しました。これで一区切り、これから前に進んで行けるという気持ちになりました。1年間色々なことがあったけれど復旧できて本当に良かったという気持ちでした。

公立と私立の違いについて

アトピッ子地球の子ネットワークから「いろん